ギリシャだより
－アブコタラコを求めて－

随　筆

松　田　准　一*

From Greece
－Looking for Abcotarako－

Key Words : Greece, Santorini, Kos, Mikonos, Crete

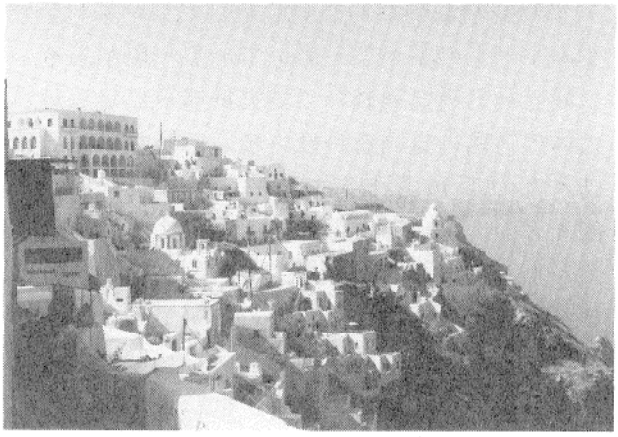
7月末に大阪大学理学部に新しい宇宙地球科学棟が完成し引っ越した．部屋の整理を早々とすませたが，機械の調整もまだ終わらない8月中旬からギリシャに調査に出かけた．これは文部省の海外学術研究で，「エーゲ海火山孤の地球科学的調査研究」という研究テーマである．この学術調査は，日本のように太平洋プレートが沈み込む地域の地震火山活動と同じようにアフリカプレートが沈み込むエーゲ海の地域の地震火山活動を地球科学的な側面から比較してみようというものである．学問的な成果は別のところで発表することとし，ここでは，ギリシャについての私の印象と旅行のこぼれ話を紹介してみよう．

ギリシャに出かけるのはこれで5回目である．ギリシャというと一般の人はどういうイメージを持つのであろうか？ エーゲ海については「紺碧の海」，「白い大理石の教会」等々，ギリシャ本土にあるアテネなどについては，「理想的肉体美のギリシャ彫刻」，あるいは「ソクラテス，プラトンなど哲学者達によるイデアの世界」といったイメージだろうか．しかし，初めてギリシャに降り立った時，私は大変驚いた．「雑踏と喧騒の町」というのがアテネに対する私の率直な印象だったのである．オンボロ車やバイクはものすごい音をたてて忙しげに走りまわっている．これが，古代にソクラテスやプラトン等の哲学者達を輩出した国だとはとても思えない．全く同じ印象を持った人も多くいるようである．川島重成さんは，その著書「ギリシャ旅行案内」の中で「私の心の中のイメージとはむしろ反対の非合理で無秩序のギリシャ」と述べられている．彼によれば，むしろ逆で，気性の烈しい本性をもつギリシャ人が合理的なものの必要性を希求し，パトスにロゴスを刻印する古代の理性主義が生まれたのだとしている．私も同感である．そう思えば，ゼウスやバッカス等のあの人間臭いギリシャの神々やギリシャ悲劇等も理解できるような気がするのである．

ギリシャは紀元前に輝かしい古代ギリシャ文化を生みだした国であるが，一方では，東ローマ帝国時代のキリスト教ビザンチン文化の影響を色濃く残している．エーゲ海の燦々とした太陽の下でバカンスといったような明るいイメージばかりが観光の広告では強調されるが，北方にはアトス山というギリシャ正教の聖地がある．ここは今でも女性禁制で，厳しい戒律の下で僧達が生活しているのである．アテネの町には偶像崇拝を禁じられたギリシャ正教に独特のイコンや宗教道具を売る店があふれていて，他の国とは異なった独特の雰囲気がある．教会も非常に多い．この古代ギリシャ文化とビザンチン文化，また400年にわたるトルコ支配による東方文化の融合といったものが現代ギリシャであり，ヨーロッパの中でも異質の印象を受ける要因となっている．

* Jun-ichi MATSUDA
1948年8月21日生
1974年東京大学理学系研究科修士課程地球物理学専攻修了
現在，大阪大学理学部宇宙地球科学，教授，理学博士，宇宙地球科学
TEL 06－850－5495
FAX 06－850－5541
E-Mail matsuda@ess.sci.osaka-u.ac.jp

エーゲ海の島々



サントリーニの断崖の上に立つ白い教会や家

ギリシャの治安はむしろ良い方である．人情も豊かで，大変親切な人も多い．ある日，アテネの町でホテルに帰る道を見失った．通りかかった中年の女性に目印にしていた広場の方向をたずねたら，手振り身振りで親切に教えてくれた．少し歩いて，これでホテルに帰る道がわかったので，近道を通ろうと，その広場とは違う方向へ道を曲がった．そうすると道を聞いた女性が，後ろから息せき切って追いかけてきた．「せっかく私が教えたのに何故反対方向に行くのか」と怒っている．どうも私達が頼りないので，間違った方向に行かないか後からじっと見ていたようなのである．私達が自分の言った方向と違う方向に行くので，あわてて追いかけて来たのである．ギリシャ語で状況を説明するのは難しいので，おばさんの言われた通り歩き，角を曲がる時，後ろを振り向くと，やはり我々をじっと見ている．この親切なおばさんの目から離れたところで，「これで大丈夫」と，やっと近道を選ぶことができた．

エーゲ海で最初に行った島はサントリーニであった．私の友人のアテネ大学の教授は，この火山島がエーゲ海で一番美しくて好きだと言っている．サントリーニは，十和田湖のような断崖絶壁のカルデラ壁に囲まれた海の中に島がある．そのカルデラ壁のすごい傾斜の坂道をロバに乗って行くこともできる．中央の島まで行ける遊覧船が出ていて，断崖絶壁の下にその船つき場がある．ロバがいかにも可哀想で乗る気にならないぐらいのすごい絶壁である．ギリシャのエーゲ海の広告にはこの絶壁の上にある白い教会を写している写真がよく使われている．

トルコに近い島では，コス島という火山島がある．この島は，近代医学の祖といわれるヒポクラテスが居たことで有名で，彼がその下で講義したといわれるプラタナスの木やアスクレピオスと呼ばれる医学所の遺跡がある．私は，「医は仁術なり」というのは中国の言葉とばかり思っていたのだが，実はヒポクラテスの言葉であったようだ．彼は，「私は自分の人生と医療技術を生涯にわたって純粋かつ清潔に保つ」ということや「男女，自由民・奴隷の区別なく，病人を癒すためだけに家を訪問する」こと等の自分に対する戒めをアポロや他の神々の前で誓っている．ギリシャではヒポクラテスは有名なようで，この誓いの碑文や立像がアテネのみやげもの屋でも売られている．大阪大学では教養部改革が行われ，私は医学部の1年生の学生に力学の講義をしているが，最初の講義の時間にこのヒポクラテスの碑文を配って「医は仁術なりというのは紀元前からあるのだぞ」という話をすることにしている．

火山島ではないが，休暇で行った美しい島にミコノス島がある．風車のある島で有名で，これもよく観光ポスターに使われている．この島はかなり観光地化しているが，それなりに面白いところもある．ミコノス島には，狭い路地が

アリの巣のように入りくんでいて，レストランやみやげもの屋がひしめいている一角がある．二度と同じ道を通れなくて大抵迷子になるが，大体の方角の見当をつけて歩くしかない．私が訪れたのは10月上旬であった．普通ならもう観光客のいない頃であるが，ミコノス島にはまだかなりの観光客がいた．また，この頃は，ロブスターが禁漁になっているはずであるが，多くのレストランの前にはロブスターが山積みされていた．こんな所はミコノス島だけであった．ロブスターは大変安くて美味なので，好きな方には是非ギリシャで食してみられることをお薦めする．同じく，火山島でない島ではクレタ島やロードス島がある．クレタ島は，半人半牛の怪獣ミノタウロスのいた迷宮クノッソス宮殿があることで有名である．しかし，思ったより規模が小さく迷宮といわれる理由もよくわからなかった．この宮殿の印象は今一つであった．期待が大きすぎたのかも知れない．

エーゲ海には，この他に詩人サッフォーのいたレスボス島（レスビアンの語源はこの島の名前から発している），聖ヨハネがあの難解な黙示録を書いたパトモス島（実際には弟子が口述筆記をしたということである．ともかく，ここは聖地になっている），またイカルスが太陽に向かって飛んでいき，翼をつけた蝋が太陽の熱で溶けて落ちたという伝説のあるイカリア島（船つき場にはイカルスの像がある）等がある．これらは，一般にはあまり知られていないし，私達もギリシャに行って初めて知った．これらの島はいづれも火山島で，コス島を含めトルコ国境に近いエーゲ海の東端に南北に並んでいる．

ギリシャのレストランは，ギリシャ語で「タベルナ」という．「タベルナでたくさん食べよう」というわけで，最初に聞いた時は笑ってしまった．ギリシャ料理といえばオリーブオイルを使った料理が多く，日本人には少々油っこい気がする．日本人の口に合うものでは，イカ（ギリシャ語でカラマーリという）のリング揚げがある．これを肴にビールを飲むと大変うまい．これなども調査がうまくいなかった時など，「カラマーリ（空回り）でビールを飲もう」という次第である．またアセリヤという名前の小さい魚のフライなどがあり，これもワカサギのフライのようで大変おいしい．食前酒としては，「ウゾ」という，透明だが水をいれると白濁する酒がある（レスボス島が名産地である）．これは日本の焼酎のように40度ぐらいの強い酒である．同じものはトルコで「ラク」という名前で，「ライオンの乳」とも呼ばれている．一杯目は「good」，2杯目は「very good」，しかし，3杯目は「dangerous」と言われていた．

「アブコタラコ」というのも，一般にはあまり知られていないと思う．「アブコタラコ」とは，魚の卵から作った日本のカラスミによく似たもので，キャビアと並ぶ珍味中の珍味であるということである．スペインにも同じようなものがあるという話を聞く．ギリシャに居る間にこれがどんなものなのか，行った先々で，調査の合間を見つけて食料品店へ行って探した．しかし，これまで見つけることができなかった．共同研究仲間のアテネ大学の教授に聞くと，ニヤニヤして，「自分も復活祭の前に年に一度食べるか食べないかだ」と言う．どうも夏はシーズンオフで，だめなのかも知れないとあきらめかけていた．しかし，調査も今年が最後で，もうこれでしばらくギリシャには来ないだろうと思っていた最後の日，たまたま常宿にしているアテネのホテルの横のスーパーマーケットに入った．そこで，念願のアブコタラコを見つけた．10℃に設定された冷蔵庫に大切に保管されていた．本当は冷蔵庫にいれる必要はないが，風味を落とさないため，温度を一定にしているようである．目の前にしたアブコタラコは，本当に日本のカラスミと全く同じ大きさと形をしているが，灰緑色をした不思議なものであった．値段は，32,000ドラクマ（日本円で約15,000円）もする．ギリシャの物価は日本の物価の大体1/3くらいだから，ものすごい高級品である．あいにく，明日の早朝，日本へ旅立つという私は，ドラクマを精算してしまい，かつ，このスーパーではクレジットカードが使えない．8年目に対面したアブコタラコをあきらめざるを得なかった．今度，再びギリシャの地を踏む機会があれば，このアブコタラコを手にいれようと思っている次第である．